



# メロス通信 不定期便



## 地域福祉室のソーシャルアクションへの取り組み

ソーシャルアクション（社会問題を解決するために個人や団体が行う具体的な行動や活動）が日常支援レベルで必要になってきています。地域福祉室では他団体と共同した公の場での活動だけでなく、日常レベルで個人を擁護するための働きかけをしています。今回は宇部市とA電力会社への小さくても重要なアクションをお伝えします。

### <宇部市生活支援課との連携・交渉>

こっつて支援員（医療生協有償ボランティア）より、利用者が毎月受診するB病院には生保からタクシー代が支給されるのに、3ヶ月に1回のC病院では受診頻度が少ないため通院移送費は出ないと担当ケースワーカーに言われ、自費でタクシーを利用していると相談があった。ケアマネと自宅を訪問し、すぐに生活支援課の課長に電話で問い合わせた。課長から「通院移送費の支給を受診頻度で決めてはいない」ことを確認し、タクシー代の支給については善処してもらうことになった。

### <A電力会社（本社）への抗議>

単身高齢者が特別な事情で公共料金を滞納。次の年金で支払うことができるのだがA電だけは支払期日を変えず数日後には送電を中止するという。暖を取れないと健康問題があると判断し、医療機関として地区担当者に支払期日の延期を申し入れたが「医療機関は正式な生活困窮者支援機関ではなく医療からの要求には応じられない」という。

すぐにA電力会社本社に抗議した。社員からは「国から生活困窮者の対応については慎重にするように言われている。またどのような団体であってもしっかりと連携するように職員指導している。A電力会社の理念は、電気を通して人々の暮らしを守ることである」と返答を受け、送電中止は見送りとなった。

このような小さな積み重が大きな力につながっていくのだと確信しています。

## 医療生協の醍醐味

緒方弘征

いのちの章典実践交流集会に参加しました。班討論では和やかな雰囲気地域組合員・職員がそれぞれの実践を共有しました。

サロン活動を楽しみにしている組合員は「病気や障害と付き合いながら暮らしているが、医療生協があるから寂しさや不安が軽くなっている。組合活動を広げていこう」

健康のひろばに一言メッセージを添えて手配りする組合員は「高齢や病気で支部活動に参加できなくなった組合員こそに愛の手を差し伸べよう」

私は地域福祉室の取組みとして、「ささえ愛ボックス」通じて職員からの寄せられる「もの」と「こころ」を必要な人に届けていることを報告しました。

若手職員は熱心に聞き入りながら、「どうしたら一歩踏み出せるか悩んでいる」

組合員が「あなたも同じ心を持っているので行動できますよ。大事なのは真心」と話しかけ、地域のパートナーとしての温かい期待を寄せました。

組合員と職員の「わたしもあなたも一人じゃない」という思いと行動が孤立を防ぐ「ゆるやかなつながり」を広げています。

地域福祉室メロスのソーシャルワーカーとして、組合員と職員の協同が作る大きな力が制度の枠を超えて地域を揺さぶっているという医療生協ならではの醍醐味を感じました。

## 手くばり探検記

進藤洋一郎

毎月健康のひろばを公営団地10か所へ80部手配りしています。地域福祉室で取り組みはじめ1年になりました。手配り時の様子で安全見守りの気になることは職場みんなでも共有しています。

手配りをしてしていると今まで気にしていた事柄を団地の風景の中に見つける時もあります。夏の猛暑をどう過ごしているか、エアコンの作動音が聴こえるか気になります。秋冬は静まりかえっているように感じました。どの団地の集合ポストもおおむね片付けてあり空室のポストはテープで封がしてあります。たまに駐車場で健文会の診療所の車も見かけることもあります。それぞれ公営住宅ごとに建設年代も異なるので、建築物を眺めていると1950年代から2020年代にかけてのまちづくりの発想とその変ぼうの体験的な比較もできそうです。

それぞれの団地でこれまで関わってきた組合員や患者さんのことも思い出しながら地域のいま変化しているところを見つけ出すと、仕事のさまざまな関連を確かめられ楽しいです。

